

デカ過ぎ！ 陰キャ坊やの肉バット



うさぎロボ 著

一章 ショタチンだらけの環境に限界の熟女、決壊の時は近い！

とある学校の校庭。

夏休みも近い時期、朝の涼しい空気の中、大人の女一人と、その前に二十人子供が並んでいた。

校舎正面、玄関の上、グラウンドから見える位置にある時計は八時を指していた。

唯一の大人、清井サエミは三八歳。普段は主婦である。若く見られようと、髪は金髪に染めてある。今は前に並んでいる二十人の男児らによって構成される少年野球チームの監督だ。

といっても、ほんのお遊び程度だ。本気でやるようになってきた子は、ちゃんとしたリトルリーグに移る。

踏み台の様な形だが、別に野球が大好きというわけでもない所以她は気にしない。

というか、むしろ本気で打ち込む人間がいないほうがありがたいと思っていた。

彼女の目的は、あくまでもかわいい男児らに囲まれ、可愛がり、慕われることだからだ。

——本気で頑張る子がいたら困るのよね。私じゃサポートしてあげられないから。

野球の知識はもともとなかった。前にやっていた監督が引っ越しでいなくなるので、やらないかと誘われた時に手を上げ、慌てて勉強したぐらいだ。

それでももう五年ほどやっているので必要な知識は集まっている。

リトルリーグで活躍してシニアリーグにスカウトされ、さらに甲子園常連の強豪校にスカウトされ、そこで活躍してプロに……という流れは知っている。

そんな才能ある子をサポートする技術も知識もないので、行けそうな子は早い目にリトルリーグに移してやる。というか、別に行けそうでなくともある程度年が上がるとリトルリーグに行く子が多い。

それも、サエミにとっては都合がいい。

——より小さい子のほうがいいもんね〜かわいいし、騙しやすいからね！

日曜日の朝から昼まで、近くの小学校の校庭や体育館を借りてサエミの野球チームは活動する——この世界では土曜日も学校があるので、昼間空いているのは日曜だけだ。

八時に集まり、十一時半で終わる。

今、集合を終えて朝礼の様な事をしている形だ。

といってもそんな堅苦しい物でもない。短い挨拶の後、すぐに怪我をしないようにストレッチをさせる。その周りを見て歩きつつ、手を貸したりするサエミ。

子供らはみな小さいというか若い。全員年齢一桁である。高学年になるとリトルリーグに行く場合がほとんどなのでそういう形になる。というか、同じ年で仲がいい者が一人行くと大体は行くものだ。

「三人も減っちゃったけど、来週には新しい子が二人入ってくるから、仲良くするのよ」

微妙につながっていないようなことを言いつつ歩く。一歩歩くたびに、ブルンブルンと揺れる。

サエミは相当な巨乳だ。いや、爆乳とでもいい。バレーボールどころかビーチボール二つ抱えているようなものだ。若いころはスイカぐらいで重力に逆らって不自然なほど形を保っていた物だが、それが加齢によって全身の肉付きがよくなるのに合わせて巨大化するとさすがに多少は重力に引かれるようになった。ついでに、尻肉もかなりで、今彼女が横を通り過ぎた小柄な男児の体積よりは明らかに尻肉のほうが多い。太ももも二の腕も、腹もしっかり段がある。

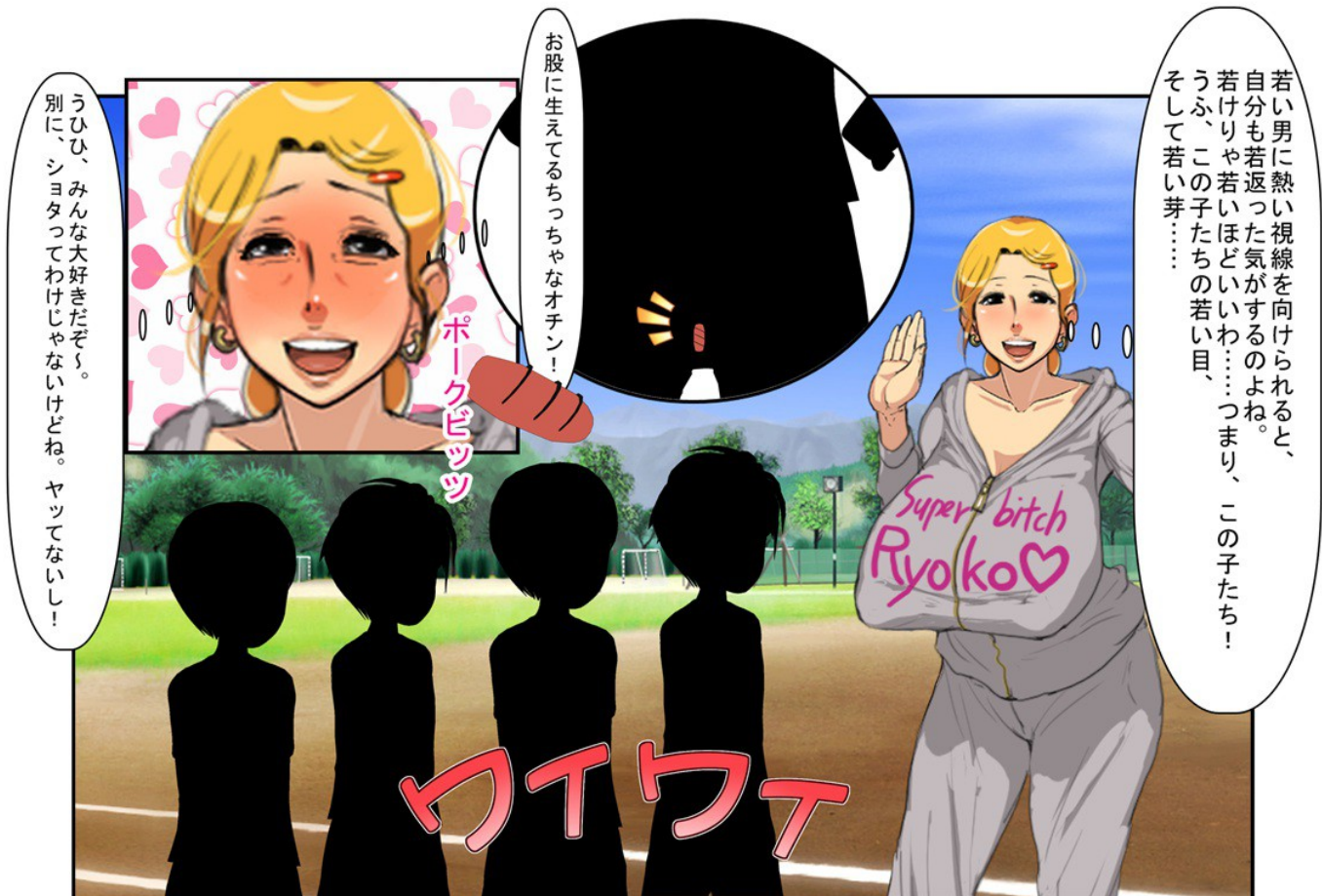
——衰えたもんよね。だから旦那とも、月一あるかどうかだもんね。

それは彼女が衰えたというより旦那の精力の減退の問題だと思えた。グラドルの無駄のない体より、むしろ肉の弛んだ彼女の体のほうが淫猥で男を興奮させる力は強いだろう。

別に彼女も、女としての魅力を失ったとは思っていない。むしろ欲情をそそる力は上がっていることは感じている。が、単純な美としては、若い頃より落ちていることも確信していた。

そんな彼女は、若い男が好きだった。というか、若すぎる男が。

——若い男に熱い視線を向けられると、自分も若返った気がするのよね。若けりゃ若いほどいいわ……つまり、この子たち！ うふ、この子たちの若い目、そして若い芽……お股に生えてるちっちゃなオチン！ うひひ、みんな大好きだぞ〜。別に、ショタってわけじゃないけどね。ヤッてないし！



確かに、本番までは行っていない。

だが確実に、彼女は男児大好き女子である。

二月ほど前に入った八歳の子。年長で九歳のチームなので年上の方だが、最近チームに入った。皆と同じようにグラウンドに足を開いて座り、右足、左足、と交互に体を伸ばして柔軟している。子供なので基本体は柔らかいが、周りの慣れている子らより固い。

それに目をつけ、しゃがむサエミ。

「ケントくん、まだちょっと固いね。手伝ってあげるわ」

「あ、はい。あっ」

さっさと後ろに回り、同じ体勢で座るサエミ。経験豊富な股間を男児の尻に押し付ける。

——うふ、見た目は似たような感じでも、女の子の柔らかいプリプリのお尻とは違うのよねえ男の

子のお尻って。まだ第二性徴とか始まってないはずなのに、筋肉の反発が違うわ。やっぱり、付いてらっしゃるのよね……力の源……

ニマ、と笑って手を伸ばす。男児の股間に。下から優しく力の源を包み込む。二つの小玉を握り込む。ビク、と体を強張らせるケント。

「はうっ！ か、監督……あっ」

背中。柔らかいモノを押し付けられ、男児はそれが何なのか考えずとも理解した。男として、揺れ動くサエミの爆乳に目がいかないわけがない。監督の顔より見た監督の爆乳。監督が背後に回り、背中に何か柔らかいものが押し付けられれば当然「アレだ」と思うに決まっている。

背中というか、背中の上の方と頭の下あたりだ。

自慢の爆乳を細い背中と後頭部に押し付けつつ、スパッツに包まれた小ぶりの男の肉を優しく優しく揉み、形を確かめる熟女。

「はいはい、集中集中。このまま体倒して……うふふ」

そこまでは普通に、皆に聞こえる声。

男児の頭は目の前。爆乳に半ば埋もれた小さな頭。ミニチュアのような耳は真っ赤になっていた。それを見て、べろりと唇を舐める爆乳熟女監督。

——うふふ、うれしい反応！ チンタマは、やっぱり年相応の可愛さね。この前トイレで見た時と変わらない。そりゃ、すぐ変わらないか。このサイズだと、オチンよりタマタマ袋刺激するほうがメインになっちゃうわね。服の上からだし。

揉みつつ、声を潜める。

「ケントくーん、結構立派なチン○ンしてるねえ。一番じゃないけど、三位には入るよ～」

実際は、下の方だ。だが皆で比べ合う事もないので、実際の上位陣以外にはこっそり「三位」だと言って喜ばせていた。

振り返ろうとして見せているケントの横顔は、サエミには確かに男の誇りに輝いたように見えた。

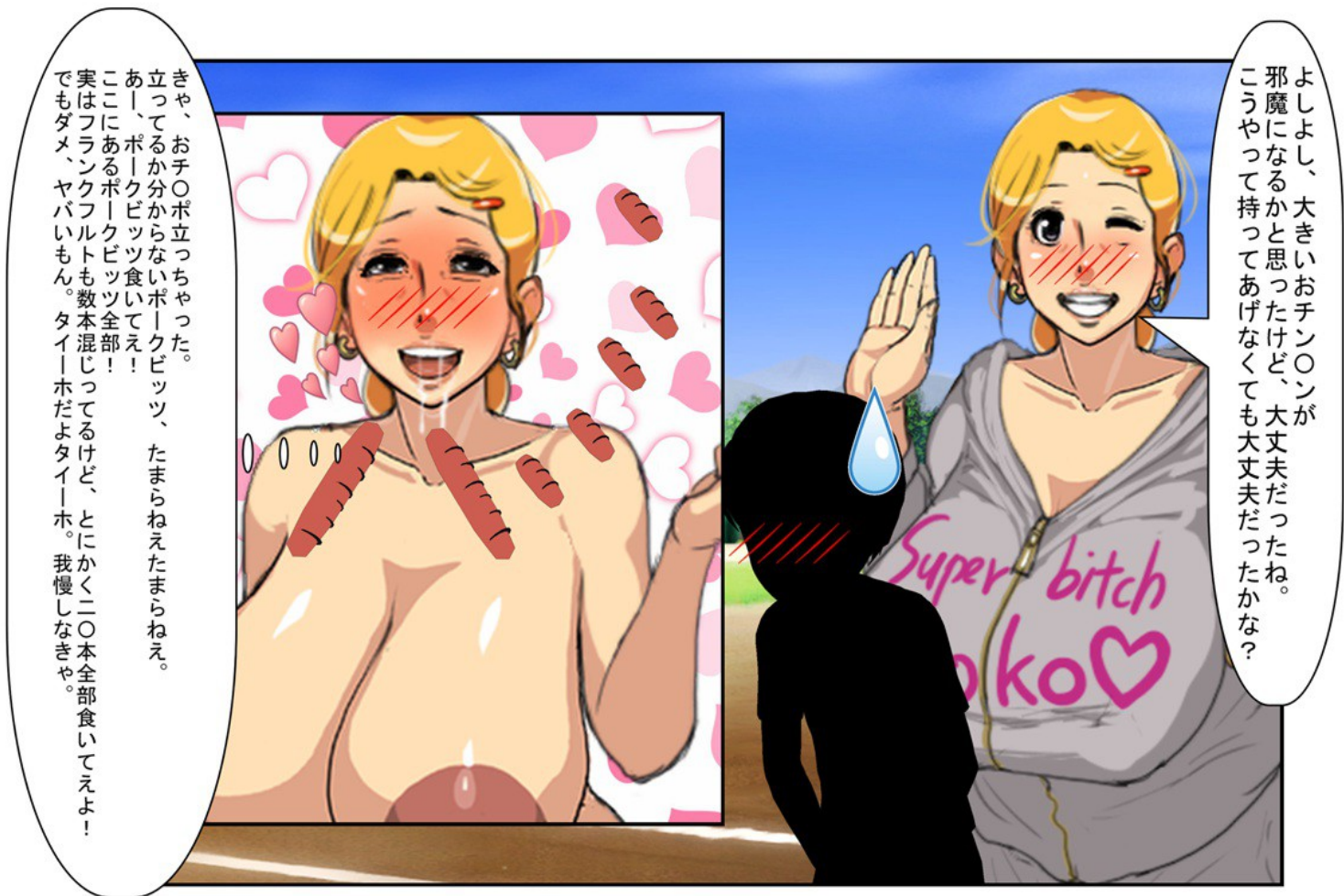
「野球やってるだけはあるね、バットが立派」

いいつつ、爆乳を背中で押しつぶすようにして押す。一人でやっているよりかなり倒れ込み、腹が太ももに付く男児。

「よしよし、大きいおチン○ンが邪魔になるかと思ったけど、大丈夫だったね。こうやって持ってあげなくても大丈夫だったかな？」

男児の股間を揉みながら、ふと手を止める。べろりと舌なめずり。

——きゃ、おチ○ポ立っちゃった。立ってるか分からないポークビッツ、たまらねえたまらねえ。あー、ポークビッツ食いてえ！ ここにあるポークビッツ全部！ 実はフランクフルトも数本混じってるけど、とにかく二〇本全部食いてえよ！ でもダメ、ヤバいもん。タイーホだよタイーホ。我慢しなきゃ。



玉竿丸ごと揉むのをやめ、スリスリと撫でる。しつつ、柔軟はやらせる器用さ。というか慣れている。股間もみくちゃ柔軟に。

——我ながら、コレうまくなったもんねえ。はじめは結構ごちなかったのに。あは、男女逆ならマジでヤバいわよコレ。セクハラだっていわれて、ちっちゃい女の子たちに寄ってたかってキ○タマ蹴られまくった挙句タイーホもありうる。その点、私は女の子なので……ギリセーフという理屈！

女でもドアウトと思える。サエミも本気で行けるとは思っていない。人にこういうことをしているなどとは絶対に話さないからだ。

それどころか「誤解されてお姉ちゃんが恥ずかしいから」といって「柔軟の時にオッパイ当たったとか、チン○ンに手が当たったことは言わないでね」と口止めしていた。

それでも話してしまう者もたまにいますが、そこは男と女では違う。本番しているでもないのだからスキンシップの範囲内と大目に見てもらえ、問題になる事はなかった。男児らにとっても恥ずかしいし嫌なことではないので——楽しくエッチな経験と感じるようにうまいこと振舞っている——そもそも話す子の数が多くないこともある。

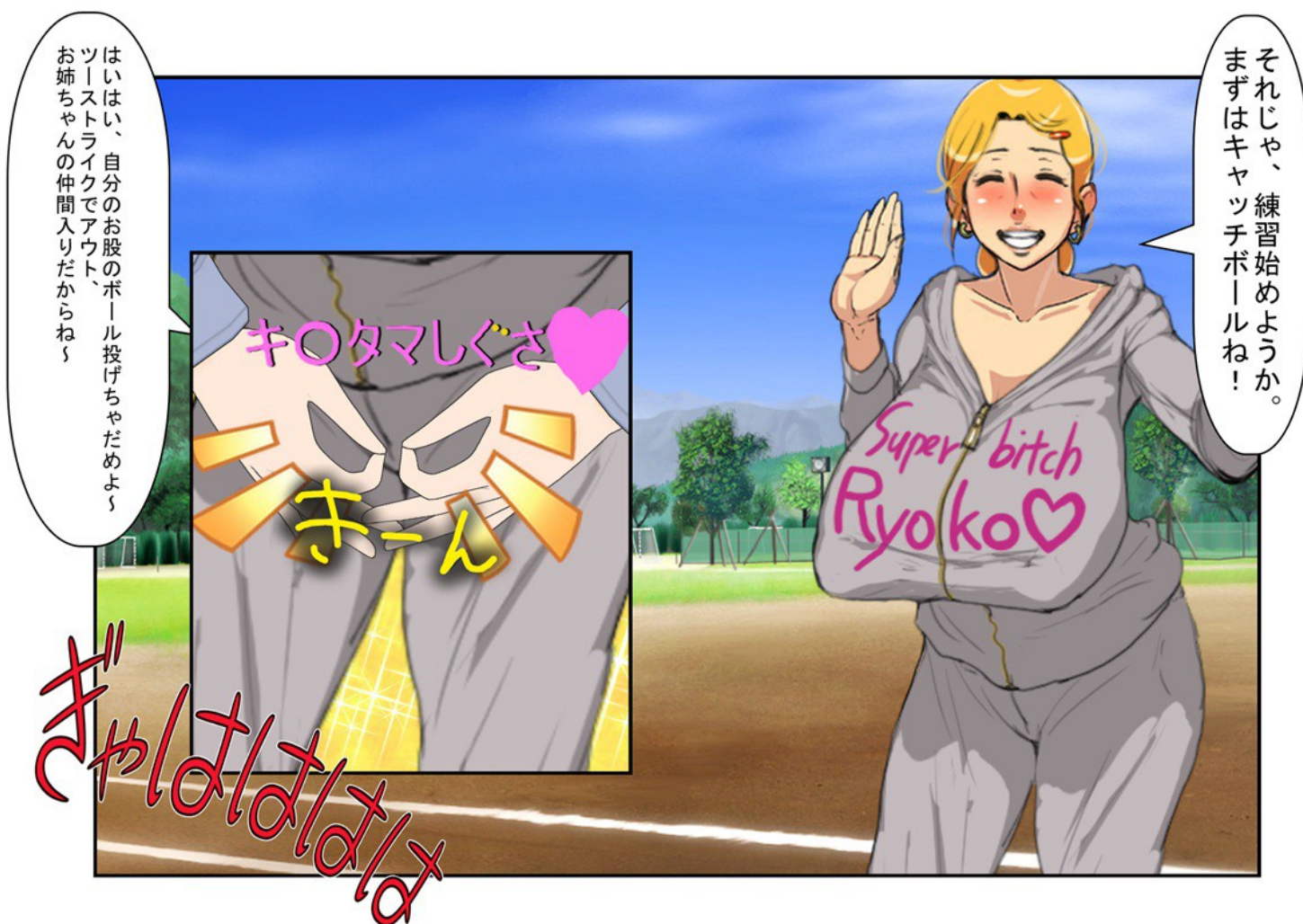
そんなヤバ目のスキンシップを次々とやっていく。全員の股間を揉むまでにはいかないが、半分の十人は揉む。十本と、二十玉を揉み、時間のこともあるので手を叩くサエミ。

「それじゃ、練習始めようか。まずはキャッチボールね！」

二人ずつ別れ、並んでボールを投げ合う。ゴムボールだ。グラブは小学校の物を借りている。

「はいはい、自分のお股のボール投げちゃだめよ～ツーストライクでアウト、お姉ちゃんの仲間入り

だからね〜」



ジャージの股間の前でリング二つ作ってみせる睾丸しぐさ。彼女のそういうノリに慣れている男児らは一斉に嘖き出し、笑いながらボールを投げ、受ける。

「みんなうまいぞ！ さすが男の子はボールがついてるだけはあるね！」

二列に並んだ男児たちの後ろを歩きつつ男のボールを擦る爆乳熟女監督。

「でしょ！ 女とは違うよ！」

と、近くの男児が言う。ニタ、と笑うサエミ。

その反応を見て、このチームが長い男児数人が何かに気づいた顔をする。まずい、といわんばかりの、少し怯えたような顔。同時に、何か期待しているような顔。

その目線に気づかず、サエミはボールを受け取ったその男児に抱き付き、ギュムっと股間のボールを握る。

「ちょっ、お姉ちゃん！ あおっ、おおおっ」

顔を赤らめ、体を強張らせる男児。ボールを揉み解され、爪先立ち。

他の男児たちが震える。

「ひいいい」

「き、キ○タマを……」

その反応を横目で見て楽しみつつ、口を開くサエミ。

「みんな、お姉ちゃんの話聞きながら続けて。みんなは男の子だから女の子より体の強さは上だよ。でも、それは女の子が劣ってるってわけじゃないのよ。皆が強いだけ。だから女の子見下す様なこといったら……弱点ボールをモミモミだよ～」

「はひいいい！ やめっ」

「急所急所、男の子の急所。キ○タマついてる男は強い。だけどキ○タマ弱いから、女はみんな玉狙う。女をいじめる悪い子は、キンキンに握ってお仕置きよ～」

モミモミモミ、と指を慣れた調子で蠢かせる。

——うふふ、やっぱり治文くんは太物ね。五人のフランクくんの一人だもんね。キンキンもずっしり大人サイズ。ケントくんと同じ年とは思えないわね。ほんと大きい、濡れちゃうわ～でもまあ、大人女子として、多少のデカチン○ンぐらいで理性が飛んだりしないわよ。

治文のモノは平時一〇センチ少し、立って一七ほど。年齢を考えれば驚くような大物だ。

似たようなモノ持ちがあと四人チームにはいる。九歳の子が二人、八歳がもう一人。

そして最後の一人のところに、治文から手を離して歩いていく。

小さい子ばかりだが、一際小さい六歳の子。

同じ年の子とボールを投げ合っている。

と、手が止まる。横を見上げる。背が高いわけでもないサエミだが、彼から見れば見上げるような背丈なのだ。

「監督、トイレに……」

「あらそう。それじゃ、どうせだから重郎くんも一緒に行きましょうか」

キャッチボール相手も誘う。監督に言われ、なんとなくついてくるもう一人。

男児二人を連れ、体育館トイレに。グラウンドを使っている者が使えるように外から入れる構造だ。当然のように男子トイレに入るサエミ。

小便器の一つの前に立つ、ガニ股で、腰を突き出す。

「さあ、二人もお姉ちゃんの横にね」

「ぎゃはは！ 監督何してるの！」

「立ちションよ立ちション」

ジャージの股間の前に指二本出して見せる。

笑い転げながら、二人も見上げるような小便器の前に立つ。

ズボンを下し、モノを出す。

年相応、皮に包まれた小指の先の様なモノと、その二〇本分以上の体積はありそうな大人としても大きめに見える巨棒。

その巨フランクを見て、満面の笑みの隣の男児重郎。

「虎助のチン○ンやっぱり超でけーよ！ 監督もそう思うでしょ！」

「うふふ、そうね。でも人にそういうこと言っちゃだめよ。お姉ちゃんは知ってるからいいけど」

「はい。でもいつも思うけど、監督ってお姉ちゃんって年じゃないんじゃない？ あ、ちょ、はうっ！」

「え、まって、僕まで……はふっ！」

小便器前に並ぶ男児二人の間に割り込みしゃがんで、外から抱え込むように腕をまわし、逃げられないようにして股間に手を伸ばす。下から持ち上げ、四つの玉を握る。両方とも、毛の一本もない所

だけは共通している。

すべすべの玉袋を揉み解しつつ、にんまり余裕の笑みの熟女監督。

——うふ、キ○タマ握っちゃった。この態勢になればどんな強い男の人にも勝てる！ 男である限り、どんなに強くても女の子にキ○タマを狙われて負ける可能性が常にあるのよね。あー、男の人って儂いわ〜。好き。

「虎助さんと重郎さん、キ○タマ四つ握っちゃいました。で、お姉ちゃんの年がどうしたって？」

二人から見れば母親より上だ。

だが、大人サイズのずっしり肉玉を握られた虎助も、年相応の小粒を握られた重郎も、この状況では握っている女に都合がよさそうなことをいうしかない。

「お、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよね、重郎くん」

「そ、そうそう！ 虎助の言う通り！ お姉ちゃんは若い！ おばちゃんじゃない！」

「うふふ、そうでしょ。で、若くて……その上どうかな？」

「え……あ、オッパイ大きくて美人です！」

「そ、そうそう！ デカパイ！ お姉ちゃんデカパイで美人！」

「うふふ、ありがとう。お礼に……おチン○ン持ってあげるね」

虎助のフランクをむんずと掴む。重郎の小指の先を優しく摘む。

どちらに向けるのも同じ慈しみと、**肉欲に満ちた目。**

——ああ、二本とも食っちゃいたい。食っちゃいたい。大人フランクをマンマンで、ポークビッツをお口でちゅぽちゅぽしたい！ でも我慢！ 我慢よ。ヤバイもんそんなの。

どうにか理性を保っているサエミ。

——ああ、六歳相応で自分の小ぶりの手にもすべて隠せる重郎さんと、同じ年とは思えない虎助くん。大人の中でも大きめサイズといえるものを小ぶりの体に搭載しちゃった虎助くん。この二人が並んでると、一人でいるよりエグイのよねえ。重郎くんのがかわいいのがよくわかるし、虎助くんのがえげつないのがよくわかる……理性削られるわ。でも、我慢できる。今までできてきたんだもん。

皮つきなので飛び散る重郎。当然のように剥き出しなので綺麗に放水できる虎助。

虎助を振って雫を飛ばし、先っぽをティッシュで拭くサエミ。

重郎の方は飛び散ったモノを拭ききるため、小ぶりの小指からささやかな肉袋まで丹念に拭いていく。

その丁寧な手つきを、顔を赤らめて凝視している男児二人。

特に、虎助。

——ああ、いいな重郎くんは。チン○ンみんなと同じだから、おしっこ飛び散って、拭いてもらえる。僕は全然飛ばないからな……

「はい、重郎くんいいよ。あは、それに……」

まだ出しっぱなしの虎助のフランクを見て、にんまり笑って掌で包み込む。

「ほら虎助くん、立派なチン○ン見せびらかしてないで、仕舞った仕舞った」

「み、見せびらかしてなんか……」

「お姉ちゃん、俺は？ あうっ」

「はいはい、こっちも立派な男の子。立派なチン○ンに、タマタマが一つ、二つ」

丸出しのそれを指で優しく突く。腰を引き、慌てて股間を庇う重郎。虎助もだ。

それをニコニコしながら見つ、サエミは男児らとの濃厚なスキンシップで、自分が濡れているのを感じる。

と、重郎が見上げてくる。

「お姉ちゃんは、おしっこいいの？」

「ん、したくないからいいわ。それに……ほら」

「わっ」

「ちょ」

ズルリ、とジャージとパンツを一気に下ろす。引っかかるものがない気安さだ。

パンツの下は、密林とっていい豊かな茂みに覆われた女の割れ目。赤黒いバラの様な花びら。小指のようなしっかり発達した小豆。汗とそれ以外で湿ったそれらが、むわっと女の淫猥な臭いに満ちた湯気を放出する。

ちょうど顔が股間辺りの男児二人。

別に今初めて見せるわけではない。

息抜きで水泳をやることもあり、その時には着替えという口実で覗くは見せるわである。

年上の子らほどではないが、ある程度慣れているので——彼らのキャリアで「ある程度慣れる」のだから相当まずい頻度で見せていることになる——二人はいつものご褒美とでもいうか、昼食に好物が出たという感じに、普通に喜びの表情を浮かべ、ちらっと目くばせし合う。

そして凝視、凝視。そこの使い方も知らず、ただ男の本能で割れ目を凝視。

サエミは一連の動きを見下ろし、目を細めて恍惚とした表情で熱い息を吐く。

——うふふ、水泳の時だけじゃなく、こんな流れで何度も見せてあげてるのに、やっぱり毎回熱視線。若い男の子が、こんなにしてくれるのはほんと……さらに濡れちゃうよ。

考えつつ、腰を突き出す。

「この通り、お姉ちゃんおチン○ン無いから、立っておしっこは無理。立ちションしてる子を見ると、ちょっとねえ……コレ、うらやましいなって思っちゃうよ」

言いつつ、二人を見る、二本を見る。

一本は、ピクピクと、小さく痙攣しながら命の芽吹きを見せる小指。いずれは一人前に成長するに違いないが、今はまだ年相応の飾りのようなモノ。それでも、分厚い皮の中で力強く膨らんでいるのがサエミには手に取るように感じられる気がした。

——ああ、手に取りたい……っていうか、お口の中でぺろぺろしたいぺろぺろしたい、皮ン中に舌突っ込んでチンカスこそぎ落としてえ……ついでに小豆金の玉も一緒に口に含んでコロコロしてあげたい……でもタイホーはやだ、タイーホはやダ、だから我慢我慢……生殺しよこれ。ああ、もう五年ぐらいこんな感じで、こういうかわいい子を見るだけの暮らし。溜まんねえぜこんなの。しかも、その五年で旦那の元気は目に見えて下がって、エッチ回数が激減していつてるときたもんだ。正直我慢の限界……でも、耐えて見せる。タイーホはやだもん。

涎を垂らさんばかりの顔で、小指から目を反らす。次はもう一本だ。

そちらはすでに大人サイズ、その中でもやや大きめ。大人に交じっても中の上ぐらい。先っぽははじめからむき出しで、年齢相応のピンクの先端がパンパンに膨らんでいる。ビクンビクンと力強く痙攣する。

——おお、ほんとご立派……おキンキンも指で作ったオッケーの輪より大きいわ、ずっしり大人サイズ。この年でねえ。くう……この子があと一二年チームにいて、時間経過で普通に成長しちゃったら……それこそ我慢できなくなりかねない。小さいチン○ンはかわいくて好きだけど……マンマンに入れさせたいという欲求も小さいもん。一方で、やっぱりねえ……デ○チンは、魔力あるわよ。啜えたい欲求は、小さいチン○ンのほうが強く感じるけど、マンマンに入れてほしい欲求はやっぱり……

デ○マラ、これでしょ。この子含めて、チームには大人級のデ○チンくんが五人いて……大人ならそんな巨根って程でもない、まあギリ巨根程度。だけど、こういうショタっ子の体についてるともう……うほおおおお、でっけえええ！ って気分上がっちゃってマ○コ濡れちゃって……おっと、汁垂れちゃう……

ズボンを上げる熟女監督。

「それじゃ……うふふ、二人とも……」

にまあ、と笑い、しゃがむサエミ。そして当然のように、膨らんだ男のシンボルを握る。後ろから尻を抱きかかえるように腕を回して握る。ツルツルだが、女兒の尻と違って多少筋肉の力強さがある尻の感触を腕に感じつつ、シンボルを二本掴む熟女監督。

片や太い茎をがっしりと、頭部は剥き出し。

片や小指だけではなく、小ぶりの肉袋ごと優しく包み込む。

「ふおおお」

「ちょ、監督っ」

「ほれほれ、二人とも、チ○コお元気ですね～」

ぎゅぎゅ、と太い雄の柱を握る。つま先立ちになる虎助。

「はひっ」

「今度は重郎くんよ～」

「ちょ、ほおおお」

くりくり、と皮で小指の中身を優しくこすって刺激する、目を見開く重郎。

チラチラと左右を見つつ、ため息をつく熟女監督。

——あーあ、このまま雄汁が出るかどうか確かめたいわ～特に虎助くんのデッカチン、もう絶対出せるでしょ、ガチ本番可能だよ。くう、でも手コキはさすがに一線超えてるよね。ダメだよ。

男児らの性器を撫でまわし、女性器を見せ、勃起させたのを握り……という現状でも明らかにライン越えと思える。

が、出させてしまうとさらにその先に……と行くかもしれないので、ここで止めるというのは当然正しいだろう。

大人サイズの握り心地と、ぴくぴくする命の芽吹きと小ぶりの肉プリンの感触を名残惜しく感じつつ、どうにか手を離す熟女監督。

萎えたら練習に戻るように言って、女子トイレに行く。

個室に入るや、ズボンを勢いよく下ろす。ねちょりと下着が糸を引く。

「くううう、もうたまらんッ、マンズリこくっ！」

ぬちょ、と特に狙いをつけるでもなく、指二本自らの雌穴に滑り込ませる。もう片方の手は飾り気のないブラの下に入れて、爆乳をもみ、乳房を摘まんで転がす。顔を赤らめつつ、洋式トイレに座る。

「ん……くうう……」

——ああ、ダメよ虎助くん、君の初体験はもっとかわいい若い子と……え、私が好き？ 若い子なんかより女として明らかに格上だから童貞捧げたい？ しょうがないにやあ……あ、重郎くん、え？ しゃぶれよ？ そんな台詞どこで覚えたの……悦んでおしゃぶりしちゃいまーす！ でも、私なんかでいいの？ え、若い女なんてマ○コしか使えない？ 啜えさせても赤ちゃんのおしゃぶりみたいでつまらない？ ごもつとも！ ほんじゃ熟女のテクニクみせましょうね～。と、おおっ、虎助くんの太い、太いい、こんな去年まで幼稚園児の子に、こんなぶっといポコンチンついてるとか反則……しかも若い女よりお姉ちゃんのほうがいいなんて……おおっ、マ○コいいマ○コいいんっ。重郎くんのタマチン両方ペロンちょで舌でもみくちや……あ、金の玉には優しく。わかってる分ってる。舌で

も金的は可能だもんね。玉弱！ おおっ、つよつよマ○コも、おチン○ンには弱いのおお……もちろん後で重郎くんにも入れてもらうよ。っていうかも……

「くふうう、いいっ、いけそう……ご無沙汰のおかげで……んくっ、あっ」

頭をのけぞらせ、小さく体を痙攣させる。

ぐったりと力を抜く、ヌポリと指も抜ける。

「はあ……小さな絶頂……もっと頭ぶっ壊れるほどおもっくそイきたいわ……ああ、あの人がもっと頑張ってくれりゃ……。回数減るのは仕方ないとしても、面倒なのか割と手抜きになってくるのが……奥さんを手抜きエッチで欲求不満にするとか、そろそろ教育してやるべきかしらねえ。キ○タマに。いやいや、フェラん時にお仕置きの玉握り潰しとかしたら余計にエッチへの足が遠のいちゃう」

彼女が生きている世界は、ナノメカ入りの薬でどんな怪我でも秒で治せる世界である。

そのため女の中には睾丸への攻撃を軽く考えるの者も結構いる。

とはいえ、彼女も本気で玉潰しをくらわしたいとまでは思っていない。

それこそ浮気をされても、それほど怒らないかもしれないぐらい冷めている。

というか、自分が男児らにいろいろな劣情を抱いていろいろしているのだから、旦那が多少何かしてもそんなに怒れないという思いも大きい。

女子トイレを出て、子供らに合流。

それから、下ネタをいいつつ、隙あらば男児らの股間を揉み解しながら指導を続ける。

昼前に終わり、整列して解散。

プールがある小学校なのでシャワーなどもある。夏なのでプールとセットで鍵を預かっている、息抜きに泳げるようにだ。

が、泳がない時はシャワーも使わないのがこのチームの伝統だ。

代々の監督がオッサンばかりで、シャワーを浴びさせようという考え自体がなかった。

男児らも汗臭いとかベタベタして気持ち悪いなどとは考えもしない。

サエミは交代当初それはどうかと思っていたが、あえてシャワーぐらい浴びて帰ろうとは言わなかった。

——毎回シャワーなんか浴びさせたらヤバイよ。水泳の時は当然のように入り込んで、一緒に浴びてるけどさ、それは時々プールの時だからこそ、一線超えないでいられる、我慢できるからやっているのであって……毎週そんなことしたら……すぐ一線超えそう。そうだよ、毎週じゃ絶対無理。体見せるだけじゃ済まねー。だからダメ。ごめんねみんな。本当は毎週一緒にシャワー浴びて、このオッパイ見せ付けてみんなのかわいいモノピンピンにしてあげたいんだけど……順番にハメさせてあげたいんだけど。っていうかハメてほしいんだけど……我慢するわ、私。

家に帰る。

日曜なので夫も家にいた。

今年から中学の娘もだ。

思えば、その子が八歳ごろから監督である。八歳などまだまだ手がかかる時期だ、なのに毎週他所の子の相手をしているなど結構無茶している気もする。

が、別に文句を言うでもなく、愛想がいい娘である。

それが黙って、廊下の角に座っている。満面の笑みだ。

——あ、これは……あなた、ご愁傷様ね。

片頬で笑いつつ、素知らぬ顔で通り過ぎる。

居間にいた旦那と適当に話す。背が高く、筋肉質の夫。

さほど時間が経つでもなく、旦那が部屋を出ていく。

そして、廊下からうめき声。

「あがつ！　ちょ……」

「ぎゃはははは！　パパ隙だらけ！」

娘の笑い声。

廊下を覗く熟女監督。

股間を押さえて腰を引く旦那と、その前で大股開きで腰を突き出す娘。

「あらあら、どうしたの？」

「うん、ママ、パパが隙だらけだからさ、ちょっと股間にパンチをね。そしたらなぜかこんなに大ダメージを受けた感じで」

「あら、何でかしらねえ？　股間にパンチなんて、弱い女の子の私たちでも全然ダメージなんて受けないのに」

ベシベシと、ジャージの前を叩く熟女監督。娘も、スカートの前を叩く。

叩きつつ、夫、父を見る。

家族の中で、唯一「付いている」者を。

娘が、父親に向けるにはまずそんなメス顔めいた表情を浮かべつつ、スカートをめくる。

「ほらほら、ここには何の弱点もないから、女の子なら全然平気だよ〜。パパはここに、何か弱点でもぶら下がってるのかな〜？」

夫に性差煽りをかます娘を見つつ、思わず微笑むサエミ。

——この子本当にドSねえ。幼なじみの子にもよく電気あんましてたもんね。パパとよくお風呂に入りたがって、隙あらば玉握り潰しで……将来の旦那さんも、タマタマが持たないでしょうねえ。まあ、秒で再生するからいいっしょ、とも言えるけど。

とんでもないことを考えつつ、居間に戻る。

サエミは一様、ダイエット中だ。

机の上に、お菓子の袋。

娘や夫が食べるように置いている。

喉を鳴らす。

——だめよダメ、私って、一回我慢しきれなかったら、限界までいっちゃうから……

頭を振る。

だがなんとなく、中身を手に取る。小分けされたクッキーだ。

——ま、一つだけ……

開けて、食べる。久しぶりの甘みが口の中に広がる。サクサクとした歯ごたえもたまらない。

気づくと、クッキーの袋は空になっていた。

「あれ？　ママ食べちゃった？」

「ご、ごめんね」

「いいけど……ママってなんていうか、我慢しきれなくなったら、一気に行くところまでいっちゃうよね。全部食べちゃうなんてさ」

「そうなのよねえ。よくないわ……」

それは、お菓子だけではない。

——きっと、あの子たちもだわ。誰か一人と、本番しちゃったら……絶対歯止めが効かなくなる、全員食いしちゃう。だから最初の一人、絶対我慢しないと。

屑籠の中のクッキーの小分け袋の山を見下ろしつつ、教え子たちを食わないと誓いを立てる。

次の週、あっさり破ってしまう誓いを立てる。

体験版終わり

この後、見たこともない巨バットの出現に熟女の我慢は限界を迎える

続きは製品版でぜひお楽しみください